

桐山恵子著

『境界への欲望あるいは変身—ヴィクトリア朝
ファンタジー小説』

京都：世界思想社、2009、2,300円、226頁。

小泉朝子

ヴィクトリア朝の小説をファンタジーという枠組みで捉えると、何が見えてくるのだろうか。『境界への欲望あるいは変身』は、ファンタジー小説こそ、十九世紀末の社会を的確に描き出せるジャンルであるとする示唆に富んだ書である。取り上げられる作品は幅広く、『ドリアン・グレイの肖像』や『メアリー・バートン』、『ジキル博士とハイド氏』等の名作のみならず、比較的読まれることの少ない童話やゴシック小説、幽霊物語も含まれる。

「未曾有の繁栄を享受しつつし、もはやそれ以上の成長を楽観的には見込めない」十九世紀末のイギリスでは、人々は未来への希望を持たないまま不安や懐疑心に苛まれていた。薄暗い現実という境界を越えてどこかに連れて行ってほしいという欲望、自分とは違う存在に変身したいという欲望—ヴィクトリア朝の人々が抱える不安にはそうした欲望が秘められているのではないか。そして、この不安を表象できるのは古典的なリアリズム小説ではなく、むしろファンタジー小説だったと氏は主張する。当時の読者にとって、ファンタジーというオブラートに包んだ現実ならば苦いものでも多少は消化しやすいし、その糖衣ゆえにつかの間の安寧を運んでくれる、というわけだ。事実、十九世紀末のイギリスは電話の発明や鉄道の普及により、それ自体が既にファンタジーの様相を呈していた。死者との対話を目的とした心霊協会の設立は一八八二年であり、科学とオカルト、ファンタジーの位置の近さを象徴的に提示する。現実とファンタジーの境界が曖昧な世紀末の世界を描写できるのは、それ自体が「はざかいに位置する超越的な形式」であるファンタジー小説において他にない。

「プリンセスでなくなるお姫様」の章では、メアリー・ド・モーガンやイヴリン・シャープらの童話に取り上げられ、お姫様の地位を離れるお姫様たちが登場する。理想郷が消えたヴィクトリア朝の童話を象徴する新しいヒロインとして様々な立

場のお姫様が分析され興味深い。

肖像画が変化するという点では、『ドリアン・グレイの肖像』も非現実的な世界を描くファンタジー小説と言えよう。だが、桐山氏が指摘するように、セジウィックの定義に従い、このテキストをゴシック小説と捉えて肖像画の空間移動に着目すると、古典的なゴシック小説と『ドリアン』とでは、約束事に逆転が生じていることが解き明かされる。従来は地上から地下へと下に向かって事件が発生するのに対し、『ドリアン』では肖像画が一階から最上階へと上へ向かって移動しており、事件が起きるのも最上階だ。屋敷の内側と屋敷の外側という、内界、外界の持つ意味も逆転している。『ドリアン・グレイの肖像』とは、境界を挟んだ空間の縦軸と横軸、その両方の意味が逆転した空間の中で永遠に年を取らない自分でいたいという欲望を抱えた主人公の物語である。

第七章では『メアリ・バートン』が取り上げられ、ヒロインであるメアリの容姿がラファエロ前派の描く「絶世の美女」、ファム・ファタルのそれに重なることが図版を用いて指摘される。メアリは、富裕層や紳士階級の男性を魅了することで階級差という境界を越え、結婚によってレディになるという欲望を持つヒロインと解釈される。氏は、メアリが工場経営者の息子、ハリ・カーソンに求婚されると突然冷淡になる場面に注目し、容姿だけでなく行動においても男を翻弄するファム・ファタルに変身していく過程を分析する。さらに、人魚や水の精、セイレーンなど、水にまつわるファム・ファタルの表象に言及し、最終章に隠されたメアリの欲望をも解き明かす。

ダーウィンの『種の起源』以降、動物としての人間が抱える暗い欲望を描き出したいと願う作家は多かった。が、ミセス・グランディの監視の目をかいくぐりつつ、そうした口に出せない欲望やタブーを分節化する際に、ファンタジー小説は格好の表現形式となった。本書は、十九世紀のファンタジーという枠組みを通じて、ヴィクトリア朝小説の読者に新たな視点と解釈を提示してくれるのだ。

(早稲田大学非常勤講師)